

結婚1年目、34才で下された宣告。
闘病生活では誰も教えてくれない「なぜ？」に直面。
そんななか、抱いた希望——

「余命半年」

次のクリスマスまで 次の



乳がんの妻³⁸

誕生日まで そして最期まで

二次使用禁止



母親を卵巣がんで亡くした彼女は、毎年の乳がん検診を欠かさなかった。しかし、下されたのは若年性乳がん余命半年との宣告。絶望に陥りながらも、次のクリスマスまで、お正月まで、誕生日まで、と短いスパンで未来を描き、希望をつないできた。その彼女が、来るべき日を前に、全女性たちに、そして医療の現場に、国に、伝え遺したいという覚悟のメッセージ——

取材・監修／伊藤隼也

12月某日、零下5℃にまで冷え込んだ札幌。雪の降り積もる市内に建つがんセンターの一室——この部屋に入院しているのは、乳がん患者の藤谷ベコさん(仮名・38才)だ。彼女の入院生活はすでに5か月に及ぶ。先日、CTを撮ったところ、肺に水が溜まっていることが判明し、数日がかりで抜いたばかり。ドレーン(体内の液体を排出するための管)を入れたときの痛みがまだ体に残っている。

入院中も、体調が良いときはパソコンを開いたりしていることが多かったが、痛み止めの薬の量を増やしたいままは動くことができません。一日の大半を横になって過ごすようになった。

「……できれば、クリスマスや年末年始には帰りたいんですけどね……」

彼女がそんな切実な気持ちを綴るのは、人気ブログ『若年性乳がんになっちゃった!ベコの闘病日記』。「闘病ブログ」としては、日本でNo.1の250万アクセスを記録している。

ときに弱音を吐くことはあっても、藤谷さんの日記に悲壮感はない。壮絶な闘病を続けながらも、「最後まで諦めない」という彼女の姿勢が、多くの乳がん患者たちの希望となっている。

と突き放された。

そして、藤谷さん夫婦は北海道でしっかりと治療をしようとした。

北海道での新生活は慌ただしく暮らした。マンションの入居予定は4月。

その直前の07年3月下旬に北海道がんセンターを受診し、しばらくはビジネスホテルと病院を往復する毎日が続いた。病院では、マンモグラフィなどの検査のほか、乳房の細胞を針で採取して、がん細胞の有無やタイプを調べるなどの詳しい検査が行われた。確定診断の結果、やはりステージIIの乳がんだった。

主治医の渡邊健一医師は以後の治療法について丁寧に説明してくれたが、藤谷さんは絶望的な気持ちでいた。

「このころは、誰を信じたらいいかわからないというか……人間不信で自暴自棄な気持ちになっていました」(藤谷さん)

現在の乳がん治療は、がんを摘出する手術と、抗がん剤などを併用した薬物治療が中心になっている。がんのなかでも治療が進んでいるほうで、早期発見できれば生存率も上がる。個人差はあるが、早期発見した場合の5年生

72年、神奈川県に生まれた藤谷さんは典型的な文化系少女。として育った。10代のころの夢は小説家。三谷幸喜さんに憧れ、戯曲を書いたり、コンサートスタッフのアルバイトに明け暮れる学生生活を送った。大学卒業後も語学留学や海外旅行に行くなど活動的な生活を送っていた。結婚の願望を抱いたことは一度もなかったという。

派遣社員として、県内のある研究所に勤め始めた藤谷さんが同じ研究所の違う部署で働いていたAさん(40才)と出会ったのは04年、会社の主催する飲み会だった。

「カラオケへ行ったら、フリップス・ギターとか斉藤和義とか歌っていて、私と同じような歌が好きなんだあって思いましたね」(藤谷さん)

趣味があつたふたりは交際をスタートさせ、いつの間にか結婚を意識するようになる。2年後にAさんは藤谷さんの親にあいさつに行き、06年に横浜・山下公園にある式場で結婚を挙げた。

結婚してからも仕事は続けていた藤谷さんだが、Aさんとは「子供はふたりくらいほしいね」と将来を語り合っていた。

その藤谷さんが最初に体の異変を感じたのは、結婚から4か月がたった10月下旬のことだ。お風呂で胸を触ったところ、びっくりするほどの痛みを感じたため、病院でマンモグラフィ検査を受けた。

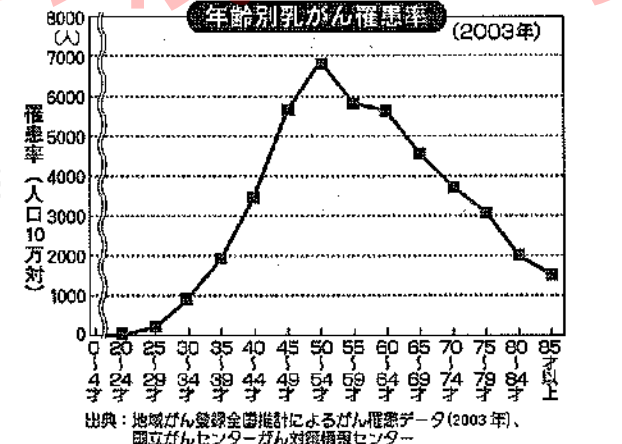
結果は「特に異常はない」とのことだった。

藤谷さんの母親は04年に卵巣がんで亡くなっている。そのため、藤谷さんは毎年必ず乳がん検診と婦人科がん検診を受けていた。異常を感じる1か月前にも乳がん検診を受診。超音波検査で右胸に黒い塊が映っていたものの、触診上は異常がないと判断され、心配しなくてもいいとの診断だった。



健康なとき47~48kgあった体重は10kg近く落ちたという。「水を飲むことすらつらい時期がありました」(藤谷さん)

乳がん発症のピークは40代~50代



出典：地域がん登録全国統計によるがん罹患データ(2003年)、国立がんセンターがん対策情報センター

か結婚を意識するように。2年後にAさんは藤谷さんの親にあいさつに行き、06年に横浜・山下公園にある式場で結婚を挙げた。

結婚してからも仕事は続けていた藤谷さんだが、Aさんとは「子供はふたりくらいほしいね」と将来を語り合っていた。

その藤谷さんが最初に体の異変を感じたのは、結婚から4か月がたった10月下旬のことだ。お風呂で胸を触ったところ、びっくりするほどの痛みを感じたため、病院でマンモグラフィ検査を受けた。

結果は「特に異常はない」とのことだった。

藤谷さんの母親は04年に卵巣がんで亡くなっている。そのため、藤谷さんは毎年必ず乳がん検診と婦人科がん検診を受けていた。異常を感じる1か月前にも乳がん検診を受診。超音波検査で右胸に黒い塊が映っていたものの、触診上は異常がないと判断され、心配しなくてもいいとの診断だった。

しかし、結婚1年目の冬の終わり、藤谷さんは再び胸に違和感を感じる。違和感はやがてチクチクとした痛みに変わった。そしてお風呂にはいり、体を洗っていたときに、左右の胸の硬さが違うことに気づいた。

「カチンコチンという硬さじゃないけれど、あれ?」って、思ったんですけどね。主人にも見ってもらったんですが、いままでもこういうものはなかった。って。だんだん普通にしていてもビリビリと痛く

「なぜ見逃されたのか、ふざけるな」と頭に血が……

検査結果を聞きに病院へ行く。藤谷さんに担当医は「あれ、ご家族は来ないの?」と聞いた後、いきなりこういって「(右胸の右下)あたりから、乳首を伝って大きく広がっている、非浸潤がんです」

藤谷さんはこうして突然、「乳がん」の宣告を下された。07年、新婚1年目の春。Aさんの転勤で北海道へ移住することにになり、期待と不安の入り交じった気持ちで新生活の準備をしていた矢先のこと。心の準備がまったくできていないままの宣告だった。

「絶対に死ぬ、と思います。それから、ずっと検診を受け続けていたのに、なぜ見逃されたんだ、ふざけるな、と怒りで頭に血がのぼりました」(藤谷さん)

宣告を受けると、自転車に乗って自宅に戻った。家に着くと電気もつけずに真っ暗な部屋の中、ベッドに座り込

「ここにきて1日に泣く回数が増えてきました」

藤谷さんがブログで病気にして発信し始めたのは、手術の直前。当時は、記録用、あるいはごく少数のがん患者とのコミュニケーションのツールとして、クローズ(限定された相手に向けて)のコミュニティサイトを使っていた。その後、オープンなブログに変えたところ、アクセス数は少しずつ増えていった。

「あまりにも早い再発」といわれて

07年11月、手術前の抗がん剤治療が終了し、手術を受けた。リンパ節転移が見つかったことから、右乳房のすべて

なってきた……(藤谷さん)

日々痛みは強まるばかり。不安を覚えた藤谷さんは再び検査を受けることを決意した。県内の病院で、マンモグラフィを含めいくつかの検査を受け、2週間後結果が出た。

「2日前から後頭部に違和感がある男の歌」B.Y.M.U.ディ勝山(笑)

と、その様子を冗談を交えながら報告しているが、一方で、抜けるときの痛みと一気だけに抜ける独特の感覚、髪だけでなく眉やまつげも抜け

「ご自分でなく、北海道で治療をされたらどうでしょう。私には知り合いがいけないので、好きなところに紹介状書きますよ」

再びくり返された医師からの宣告。藤谷さんは住み慣れた神奈川県で治療したほうがいいのではないかと悩み、その病院で治療していきたく希望したが、

「ご自分でなく、北海道で治療をされたらどうでしょう。私には知り合いがいけないので、好きなところに紹介状書きますよ」

「ご自分でなく、北海道で治療をされたらどうでしょう。私には知り合いがいけないので、好きなところに紹介状書きますよ」

「ご自分でなく、北海道で治療をされたらどうでしょう。私には知り合いがいけないので、好きなところに紹介状書きますよ」

「ご自分でなく、北海道で治療をされたらどうでしょう。私には知り合いがいけないので、好きなところに紹介状書きますよ」

「ご自分でなく、北海道で治療をされたらどうでしょう。私には知り合いがいけないので、好きなところに紹介状書きますよ」

「ご自分でなく、北海道で治療をされたらどうでしょう。私には知り合いがいけないので、好きなところに紹介状書きますよ」

「ご自分でなく、北海道で治療をされたらどうでしょう。私には知り合いがいけないので、好きなところに紹介状書きますよ」

「ご自分でなく、北海道で治療をされたらどうでしょう。私には知り合いがいけないので、好きなところに紹介状書きますよ」

「ご自分でなく、北海道で治療をされたらどうでしょう。私には知り合いがいけないので、好きなところに紹介状書きますよ」

「ご自分でなく、北海道で治療をされたらどうでしょう。私には知り合いがいけないので、好きなところに紹介状書きますよ」

「ご自分でなく、北海道で治療をされたらどうでしょう。私には知り合いがいけないので、好きなところに紹介状書きますよ」



'06年、藤谷さんとAさんは山下公園にある式場で結婚式を挙げた。

「先生は私に「あなたって本当に幸せ者ねー」と、笑っておっしゃいました。幸せ？ 私が幸せ？ この年でがんになって、再発して心臓の膜にまで転移して死線を彷徨ったことすらある私が幸せ？ うん、私はとっても幸せです。(中略) 何が幸せかって、自分が今、幸せだということに、心から気づけることが幸せなんです。」

渡邊医師はこう話す。「ふつうなら落ち込んでしまふ病態でも、彼女はしつかりと受け止めている。主張するところは主張して、理不尽なことがあれば、納得がいくまで闘い続ける。自身のつらい闘病生活に耐えながら、世の中に問題提起を続ける患者は、医師になって初めてです」

その一方で他者に対する優しき、思いやりが藤谷さんには溢れている。取材のときも「私より大変な思いをしている人がいるから……」と何度も口にしていった。

彼女のあきらめない生き方に、勇気づけられる人々も少なくない。

「私もそうなんですけど、ひとりだとやっぱり怖いんですよ、病氣と闘うのは。だから、

るといったことに、戸惑っているようだった。

もうひとつ、彼女を苦しめたのは治療費だった。手術や抗がん剤による治療は健康保険が使えないが、それでも1回の投与に1万〜2万円かかるものもあった。現在はAさんひとりの収入でふたりの生活費と治療費をまかなっているが、入院中は必ず6時、7時に病院に様子を見に来るので、Aさんの残業代は出ない状態だった。

「支払いにはクレジットカードを使っているのですが、多いときで、月35万円ぐらいの支払い請求が来ました。いまは17万〜18万ぐらいです」(藤谷さん)

藤谷さんは社員時代に生命保険と、がん保険、がん保険の特約にはいっていた。また一定以上の金額が補助される「高額療養費制度」を使うことで、実質の医療費の支払いは月8万円程度。だが、それでもギリギリだという。

約9か月に及ぶ最初の闘病を終え、がんは藤谷さんの体から消えた。

それからふたりは、治療中はほとんどできなかった当たり前の日常——食事や食生活を行ったり、遊びに行ったり、ドライブを楽しんだりした。また、競馬好きのAさんのために、香港競馬を見に行く旅

行を計画した。

「主人は出不精で、盆と正月に九州の実家に帰るのが、唯一の旅行というくらい(笑い)。海外旅行なんてほとんどしたことがなかったんですよ」(藤谷さん)

しかし、平穏な日々は長くは続かなかった。抗がん剤治療終了から6か月目のそろそろ初夏になろうかというある日、藤谷さんは首にしこりを見つけた。

「首のあたりにゴロゴロした腫れが出てきて。しかも切除した右胸と反対側なんです。見つけちゃった。やばいなこれ。つて……」(藤谷さん)

すぐに病院へ行き、検査を受けた。不安は的中した。再発だった。

「あと少ししか生きられないかもしれない……」

藤谷さんはこのとき、自分の命について具体的に意識したという。

すぐに抗がん剤による治療が再開された。そしてその4か月後、08年11月18日の夜、藤谷さんは寝ているときに発作に襲われた。

「突然、気持ちが悪くなって、冷や汗がすごくて、止まらなかつたんです。気がついたら主人が病院に電話してました」(藤谷さん)

病院で検査した結果、心臓を覆う心膜までがんが広がり、

心臓の周辺や胸に水が溜まっていることがわかった。早急に溜まった水を抜く治療が行われ、一命は取り留めたが、このとき、渡邊医師から間接的に「余命半年」と宣告された。

「実際のところは主人がそのことを聞いていて、私は、いままら会いたい人に会っておくように」といわれました」(藤谷さん)

Aさんは「余命半年」という残酷な事実を、妻に隠そうとは思わなかったという。

「正直、あと1年くらいかと思っていたのですが、次の春までもたないのか、短いな……と思いました。妻はあんなにがんばってつらい治療に耐えたのに、なぜ……という気持ちもありました。

でも、余命のことにはちゃんと伝えようと思った。もし、半年、を乗り越えられたら逆に新しい目標ができますから」(Aさん)

医師に宣告された「余命、

を大幅に超え、彼女はそれから今日まで治療を受けながらも生き抜いている。

がんになって自力で調べたり、人に頼ったりすることで、藤谷さんは初めていろいろなことを見て、自分が発信しなければならぬことに気づいたという。

入院中も、やりたいことを積極的にやっていった。心臓にがんができ、生死をさまよった直後、彼女は以前から計画していた香港旅行を敢行した。出発2日前まで酸素ボンベと車いすが必要なものだったが、それでも「絶対に行く」という信念をつらぬいた。

「まだ私が動ける間に(夫に)クリスマス前の香港の夜景を見せてあげたかった」という思いからだ。

藤谷さんはその後も香港旅行に再び出かけている。

主治医の渡邊医師も、「医師としては反対ですが、人としては止められない」と、旅行を認めた。

物治療薬として実際に患者に使用できるようになるまでの時間差や遅延のこと。大きく分けてふたつの問題——海外ではすでに使われているのに日本では使えない。未承認の薬の問題と、ある病気には承認されているが、別の病気には承認されていない。適応外の薬の問題とがある。

藤谷さんはその両者に直面した。「命を救うかもしれない薬がそこにあるのに、使えない」と、切実な思いを訴える。

今年にはいって、藤谷さんは、セカンドオピニオンをとった。がん治療を専門とする2名の医師に意見を求めることに決め、このことを主治

社会へ、乳がん患者へ 伝えたいメッセージ

彼女がこれまでに使った抗がん剤は10種類以上にのぼる。いま使っている2種類の抗がん剤は、3週間に1回点滴で入れる。しかし、使える抗がん剤はほとんど使い尽くしてしまつたいま、藤谷さんは、ドラッグラグ(承認格差)に直面している。ドラッグラグとは、新たに開発された薬

と闘うための絆を育むための啓発サポートキャンペーンで、参加者がリレー方式で24時間歩く形で寄付金を集める。85年にアメリカで始まり、日本では06年9月につくば市で活動を開始した。

主催する日本対がん協会に、RFLで集まった寄付金(09年までに2657万4081円・日本対がん協会発表)の使途について問い合わせると、「ほかから集まった寄付金と一緒にしているので、RFLに限定しては何に使っているか把握しておりません」との答えだった。

彼女はまた、ネイルアートやピンクリボンキティちゃんといった一連のピンクリボン運動のファッション化についても疑問を感じている。

「がん撲滅のことを本当に考えているのかなって思います。例えばがん検診を受ける人が少ないのであれば、大きなイベントを開くんじゃなくて、たとえば自治体ややっているように検診の無料クーポン券を配ればいい。それにピンクリボン運動では、マンモグラフィーを推奨していますが、私もそうだったけれど、若い女性の乳がんの場合、マンモグラフィが必ずしも早期発見に役立つとは限らない。エコーなどの併用が必要だという現場の声は無視されていま



'06年9月、がん患者やその家族、支援者が歩きながら寄付金を募る「リレー・フォー・ライフ」が茨城県つくば市でスタート。

＜女性週刊誌ナンバーワンを独走中＞

女性セブン

次号予告 12月22日(水)発売

2011年 脱セックスレス宣言 闘われる女になる!

Part 1 ツボ、マッサージ、香り、食事etc.でH気分UP
男をその気にさせる **ラブ** 注入術

Part 2 私のセカンドバージン 喪失物語
ひまひまのトキマタエピソード

Part 3 モバ美アイテムで 女力UP!
いつでもどこでも女磨き

年末年始は たっぷり転流
どっぷり転流

脂肪が増え、やわらかく丸みを帯びたわんでくる。それが年齢を重ねたからこその美しさ

40代からの オツパイ礼賛

2大特別付録

おめでとうDVDプレゼント

胸を保つ心術 エクササイズ

大逆転 大コミックスタート

女帝 由奈

作/倉科遼 画/黒川あづさ

累計250万部の超人気シリーズ「女帝」完結編が本誌に登場。
韓国のお嬢様大学に通うヒロインの波乱の人生が幕を開ける!

※今号の懸賞、クイズ、プレゼント、投票等すべての企画にご応募いただいた皆様のお名前、ご住所、ご連絡先等を、賞品や賞金、謝礼金をお届けするため、また本誌の目的に必要な情報の提供等のために利用し、その他の目的では利用しません。皆様からのほかや関係、FAXは、編集部から、当面や採用されたものは賞品や賞金、謝礼金のお届け、遅延やご迷惑いたします。また、お問い合わせは、採用させていただきます。また、お問い合わせは、FAXも今後の掲載後編としまして、外部の目に触れないように編集部で厳重に保管させていただきます。

懸賞、クイズについては、今号の企画の終了にすため、アンケートへのご協力をお願いしております。ご応募いただいた内容は、お名前、ご住所、ご連絡先、賞品を特定できる部分を除いて、統計し、ほかは、素直に返すかご辞退させていただきます。

以上、ご応募いただいたすべてのほかや関係、FAXは6か月を過ぎて廃棄することはありません。また、パソコンキータイからの応募の場合はサイト上の規約をご覧ください。

次号は年末年始特大合併号です!!

全国47都道府県

これから来る! スザンヌさん

ご当地パワスポ 105

島根県 「宍道湖うさぎ」

鹿児島県 「ウィルソン株」

芸能人 My power spot 紹介も!

おかもとまりさん

THE 料理王2 優勝レシピも!

Happy New Year

ベストセラー

うまいぞおレシピ

THE 料理王 グンチ裕三 presents

「がんを撲滅するという名目で行われている活動を信じ、亡くなるまで精力的に活動を行った友人を何人も見てきました。」

そういう人たちの遺志を無駄にしないためにも、本当に患者のためになるような行動を起こしていきたいと思えます。ドラッグラグの問題にしても、国全体の社会問題としてもっと真剣に取り上げてほしいんです」

現在も病室で闘病を続ける彼女の希望——それは元気にお正月を迎えることだという。

やっぱりブログなどを通じて、自分も大変だけどがんばろうって。藤谷さんはみんなに生かされている。っていわれたことがあるんですが、きつとそうなのだと思います」(藤谷さん)

若年性乳がんを患ったことについて、彼女はこう話す。「いまは何で私がつて考えないようにしています。乳がんは一定の確率でなる病気で、たまたまそれに当たっちゃったんだと。自分を責めることだけはしたくないんです。」

いまはそれほど死ぬことがこわくなくなってきました」

自分に向けがちなマイナスな思いをプラスに変え、藤谷さんは女性たちにこんなメッセージを発信する。